

第9回(2012.10.25 配信)

篠井純四郎の日本史講座－「間違えやすい日本の古い時代の話」

剣と刀

「剣」とか「刀(かたな)」あるいは「太刀(たち)」という言葉をよく目にしたり耳にしたりしますが、この違いについて明確に答えられる人は少ないようです。「剣」とは、刀身の根元に茎(なかご)という短い突起があって、ここに柄を差し込んで使います。なお、刀身の根元が袋状になっていて長い柄に差し込んで使うのを矛(鉾)と言います。どちらも両刃で突いたり刺したりする武器です。

「刀」とは、両刃である剣に対して、片刃のものを言います。なお、ふだん腰に差している時に、刃を上にして帯に差すのを刀、刃を下に向けて差すのを太刀と呼びました。

弥生時代から奈良時代の頃までは、主として「反り」のない直刀でしたから、剣あるいは矛が主要な武器だったと思われます。戦法が「突き」から「打つ、斬る」に変わってきた中世から、反りのある刀がよく斬れるので主流になってきました。反りのある刀は日本独特のものです。

日本刀は刃の部分に硬い鉄を使い、それを柔らかな鉄で包み、高温の炭火で焼いて、何度も叩き延ばして刀にしますが、それを「鍛錬」と言いました。「身体を鍛える」などの「鍛練」の語源です。また、槌を振るう刀匠の正面で、弟子が大槌で鉄を打つことを相槌(あいづち)ということから、他人の話などに「相槌を打つ」という言葉の語源になりました。

清和源氏の祖である源経基(みなもとのつねもと)の嫡男満仲(みつなか)の愛刀に「髭切丸(ひげきりまる)」と「膝丸(ひざまる)」がありましたが、この二刀は嫡子の頼光(よりみつ)に引き継がれました。「髭切丸」は頼光四天王(らいこうしてんのう)の一人渡辺綱(わたなべのつな)が愛宕山の茨木童子(鬼)を退治したとき以来「鬼切丸」と呼ばれ、「膝丸」は頼光が北野神社の山蜘蛛を退治してから「蜘蛛丸」と呼ばれるようになりました。この二刀は、共に頼光の甥にあたる源頼義(みなもとのよりよし)から嫡男の義家(よしいえ)へ伝えられて、源氏の棟梁のステータスシンボルとなりました。

その後、「鬼切丸」は源頼朝(よりと)へ引き継がれ、鎌倉幕府滅亡後は源氏一門の末裔である新田義貞(にったよしさだ)に伝わったといわれます。また、熊野神社に奉納されていた「蜘蛛丸」は、源義経(よしつね)の平家追討の際に、熊野神社から義経に渡ったといわれています。

平氏では「小鳥丸(こがらすまる)」という宝刀があり、桓武天皇が平安京を造営した際に、三本足のカラスが運んできたといわれ、平貞盛(たいらのさだもり:桓武平氏の祖高望王の孫)が「将門の乱」の鎮圧に向かうときに、朱雀天皇から下賜されて以来、平氏の宝刀といわれて現存しています。

天皇家に伝わる宝剣「草薙の剣(くさなぎのつるぎ)」(※1)は、神話の「天の岩戸事件」(※2)に出てくる八咫鏡(やたのかがみ)、八咫瓊勾玉(やさかにのまがた)とともに「三種の神器(じんぎ)」(※3)の一つでしたが、この刀は元暦2年(1185)の「壇ノ浦の合戦」で、二位の尼(清盛の妻・時子)が8歳の安徳天皇を抱きかかえ投身自殺した際に海中に沈んだと伝えられています。

なお、八咫鏡、八咫瓊勾玉も海に投げられたが、箱に入れられていたため海上を漂い、義経の軍勢に引き上げられたといわれますが、天皇家に伝わる大切な三種の神器を持って海に身を投げるとは、あまりにも自分勝手な振る舞いであると怒る人もいます。余談になりますが、この地方で捕れるヘイケガニは壇ノ浦で沈んだ平家の生まれ変わりとされていますが、まだ刀を差し

た蟹は捕獲されていません。

(※1) 草薙の剣

神話によるとスサノオノミコト(『古事記』では建速須佐之男命/『日本書紀』では素戔嗚尊)が「天の岩戸」事件の後、天上界を追われ出雲の国神の娘の櫛名田比売命(クシナダヒメノミコト)と結婚して「八岐の大蛇(やまたのおろち)」を退治しますが、退治した大蛇の中から出てきた剣が「天叢雲剣(あめのむらくものつるぎ)」です。この神話は大和朝廷による出雲族の帰依を物語るものという説があり、八岐の大蛇退治とは出雲族征伐、あるいは暴れる河川の氾濫に対する治水工事などではないかと言われていています。また、八岐の大蛇から出てきた剣は砂鉄のことだろうと言います。出雲地方は古代から製鉄の盛んだったことは考古学上実証されています。

この剣はスサノオから天上界のアマテラスオオミカミに献上されますが、「天孫降臨」の際に孫のニニギノミコトが携えて天下ってきます。剣は伊勢神宮に奉納されて、ヤマトタケルノミコト(倭建命/日本武尊)が東方遠征の際に、伊勢神宮の斎宮(主祭神アマテラスオオミカミをお守りする皇族の女性)だった叔母から授けられました。相模の国で火攻めからこの剣で草を切り払って逃れたことから、天叢雲剣は「草薙(くさなぎ)の剣」と命名されました。

(※2) 天の岩戸事件

アマテラスオオミカミの弟であるスサノオノミコトは海の国の神でしたが、父の命に背いて暴れ、神に捧げる神衣を織る機屋に天馬の皮を剥いで投げつけて、織女がショックで死ぬという事件が起きました。怒ったアマテラスは「天(あま)の岩戸」に隠れましたが、これが「天の岩戸」伝説です。

アマテラスが岩戸に隠れて、世の中は真っ暗になり悪霊たちがはびこるようになったため、八百万(やおよろず)の神々が集まって相談した結果、「常夜(とこよ)の長鳴鳥(ながなきどり)」を集めて一斉に鳴かせました。ちなみに、長鳴鳥を集めて止まらせた「止まり木」が「鳥居」になったという説がありますが定かではありません。

その際に「八咫鏡(やたのかがみ)」を作り、勾玉(まがたま)を集めて「八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)」を作って飾り立てました。また、アメコヤネノミコトが滑稽な祝詞(のりと)を述べ、アメノウズメノミコトが腰を大きく振りながら踊り出し、神々たちが笑い騒ぐので驚いたアマテラスがそっと岩戸を開けると、隠れていたアメノタジカラオノミコトが岩戸を開いて岩戸を遠くに投げ飛ばし、アマテラスを引き出したという神話があります。

この事件の後、スサノオは神々による審判の結果、鬚を切り、手足の爪を抜かれて、さらに莫大な賠償金を課せられて天上界を追われ、出雲の国に降りたって、国神の娘のクシナダヒメと結婚して「八岐の大蛇」を退治したとされています。

(※3) 三種の神器

三種の神器とは、「草薙の剣」と、「八咫鏡」と「八尺瓊勾玉」をいい、天皇家に代々伝わる宝物です。この三種の神器という言葉が転じて、庶民の生活上大切な、もしくは高価なものとして一般に使われる言葉になりました。日本が敗戦からようやく立ち上がったころ、空前の好景気がやってきて、これを神武(じんむ)天皇(初代天皇)以来の好景気という意味で「神武景気」と言いましたが、庶民の間では白黒テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫を三種の神器と呼んだものです。現代では、さしずめパソコン、スマートホン、3D テレビ、女子高生は、スマートホン、化粧品、チョコレートといったところが三種の神器でしょうか。

先日、青年海外協力隊員 OBの方々とお会いしましたが、初期のころ隊員たちにも三種の神器があつて、たった一人で小さな農村で暮らすのですから、無聊を慰めてくれるラジカセ、唯一の交通手段である単車(業務上ほぼ全員に貸与された)、そして命を守る救急医療カバンの三つだったと言います。ところが、現在の三種の神器はノートパソコン、携帯電話、クレジットカー

ドだそうです。

「協力隊は開発途上国の一般民衆に飛び込んで活動するものですから、派遣された国の教員や警察官など中級公務員の給与を調査して、なるべく低い現地生活費を支給されていました。当然クレジットカードなどを持つ必要はないのですが、娘や息子を心配するバカな親父や母親が自分名義のカードを持たせるケースまであり、派遣する国際協力機構(JICA)側も、トラブルを避けるためかどうか、あまり田舎に派遣したり、理念やら何やらとうるさいことを言わなくなった事もこの風潮に拍車をかけているようです。いったい自分たちは何だったのか、まったくバカげた話です」と嘆いていた昭和40年代の隊員だった人がいました。複雑な気持ちにさせられたものです。

(篠井純四郎)